敦賀市文化財マップ

常宮神社

朝鮮鐘【国宝】

慶長2年(1597)に敦賀城主・大谷吉継が豊臣秀吉の命により奉納したと伝えられています(異説あり)。銘文には「太和七年三月日菁州蓮池寺」とあり、新羅の興德王8年(833)に造られた朝鮮鐘です。天衣をなびかせた天女の浮彫りなど文様も巧みに鋳出されています。

常宮神社本殿・拝所・中門【県】

大宝3年(703)に勅命により修造したと伝えられ、古くより氣比神宮の境外摂社として崇敬を集めてきました。現在の本殿は正徳3年(1713)に再建されたもので、前室付三間社流造の形式を持つ比較的大型の建物です。各部の装飾形式等は焼失した氣比神宮本殿(16世紀)との共通点も多くあります。

拝所は昭和17年に氣比神宮から移設したものです。

所 在 地　敦賀市常宮13-11　電話番号　0770-26-1040
【朝鮮鐘拝観】 拝 観 料　300円　拝観時間　9:00～16:00
※神職の不在時等は拝観できません。事前にお問い合わせください。

天満神社

天満神社本殿・石の間・拝殿【県】

現在の社殿は、元の社殿が敦賀空襲で全焼したため、滋賀県彦根市にあった佐和山神社の社殿を昭和35年(1960)に敦賀に移築したものです。

社殿は本殿と拝殿を石之間で結ぶ権現造となっており、漆塗りの柱や鳳凰や龍、獅子などが彫られた破風、本殿及び拝殿の花々などを描いた格天井など装飾性の高い豪華な造りとなっています。

※境内見学のみ　　所在地　敦賀市栄新町1-6

高徳寺

高徳寺本殿【県】

明応9年(1500)、祐怡の開基と伝えられる真宗大谷派の寺院です。元和元年(1615)上棟と伝わる本堂は、内陣が幅3間奥行き1間で三つ並びの押板形式の仏壇を配し両脇は余間となっています。このような堂内配置をはじめ、虹梁や組物、蟇股などの装飾は古い形式の真宗寺院本堂の形態を非常によく伝えています。

※境内見学のみ　　所在地　敦賀市神楽町2丁目5-18

敦賀富士を借景にした庭園

柴田氏庭園

柴田氏は、野坂の有力農民で、寛文2年(1662)市野々に屋敷を構えました。柴田氏は小浜藩から市野々周辺の新田開発を請け負って、敦賀の豪農となり、苗字帯刀が許されていました。屋敷は小浜藩主が参勤交代する際の休憩所でもありました。

※江戸時代前期ごろの屋敷「市野々新田絵図(屋敷部分拡大)」

柴田氏庭園【国 名勝】

甘棠園とも称される柴田氏庭園は回遊式林泉庭園です。敦賀地域最高峰の野坂山を借景とし、その眺めを遮らないように植栽されています。正面の築山の下には滝口があって水を落とし、池には蓬莱島(中島)があり橋をかけ、回遊できるようになっています。

柴田氏屋敷【市】

柴田氏の屋敷は周囲に環濠が廻らされていますが、近世の有力農民の屋敷に中世の武家屋敷にみられる環濠を備えている点は全国的にもあまり類をみないものです。小浜藩の新田開発を行うにあたり、相応の格式を持たせるためと考えられます。

ヤマモモ・クスノキ【市】

ヤマモモは雌雄異種の常緑高木で敦賀半島を中心に若狭湾沿岸に広く分布しています。この庭園には、「甘葉園」の名称にちなんで植えられています。

クスノキは関東以南、四国、九州に分布する暖地性常緑高木で、各地の神社には樹齢千年を超えるものも多くあります。

所 在 地　敦賀市市野々町　　拝観時間　8:30～17:00
※現在修復工事を行っております。見学の際はお気を付けください。

尊王攘夷の進軍終焉の地

水戸天狗党

元治元年(1864)、水戸の武田耕雲斎らは、一橋慶喜に尊王攘夷の志を伝えるため京都を目指して西上しましたが、追討軍に行く手を阻まれ、敦賀の地で投降しました。

武田耕雲斎等墓【国 史跡】

慶応元年(1865)松原来迎寺野において、武田耕雲斎ら353名が処刑されました。刑場となった地にその後塚が築かれ、現在に至るまで地元の方々によって大切に護られています。

近くの松原神社には、処刑された者と病死者や戦死者を合わせて411柱が祀られています。

所在地　敦賀市松島町

武田耕雲斎本陣跡【市】

問屋を経営していた塚谷家の屋敷の一部で書院造の建物です。小規模ながら、門・式台・下段の間・上段の間を備えた格式ある造りとなっています。

木ノ芽峠を越えて新保に宿営した耕雲斎らは、一橋慶喜の命による追討軍に進路を包囲され、ここで加賀藩の使者と会談し、最終的に降伏しました。

所在地　敦賀市新保27-30

鰊蔵【日本遺産】

加賀藩に降伏した武田耕雲斎らは、当初加賀藩に厚遇され市内の3カ寄に収容されていましたが、幕府側に身柄が引き渡されると、16棟の荷蔵に監禁されました。鰊蔵での幽閉生活は、劣悪な環境であったため、病死者も続出しました。

昭和29年(1954)に港近くにあった1棟が松原神社境内に移築され、さらに1棟は水戸の回天神社境内に移築されています。

所在地　敦賀市松原町

浄土を模した癒やしの庭

西福寺

正平23年(1368)良如上人の開基になる浄土宗寺院です。建造物のほか、多くの美術工芸品や歴史資料が文化財に指定されている福井県内でも有数の文化財の宝庫です。

阿弥陀堂【国 重要文化財】

正面5間(9.82m)側面5間(10.75m)で、上段の屋根の下に裳階と呼ばれる下段の屋根を設けることで、本来1層の建物の外観を荘厳に見せています。

この建物は、文禄2年(1593)に朝倉氏の城下町であった一乗谷から移築されたものと伝えられています。

御影堂【国 重要文化財】

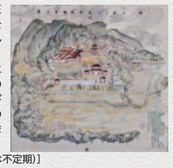
文化8年(1811)落成で擬宝珠高欄付きの縁を巡らす正面7間(21.3m)側面6間(18.7m)の大規模な建物です。堂内には、内陣の一板板の天井や胴回り約140cmの丸柱などが使われ堂々とした風格のある姿をしています。

御影堂の側周りの建具は障子戸になっており、板戸などが付けられていた痕跡もなく、建具は未完成だったと考えられます。

西福寺古図【市】

西福寺は、元亀・天正期以前には塔頭24院を構え、壮大な寺域を有していました。

この古図は江戸初期に描かれたと思われるもので、現在の御影堂などが建築される以前の境内の伽藍配置がよくわかります。



[市立博物館寄託(展示は不定期)]

書院庭園【国 名勝】

江戸中期の作庭とされ、極楽浄土を表現しているといわれています。谷あいの自然地形を巧みに利用して上下の壇で構成されています。上段には石組みを施し周囲に植栽を配し、下段は水の流れが滝となって注ぐ園池を中心としています。園池には四修廊下が張り出し、御影堂・阿弥陀堂・書院が庭園を取り囲む形で配され、建物と庭園が一体となった豊かな景観をつくりだしています。

書院及び庫裡【国 重要文化財】

寺伝では福井藩主であった結城秀康が発願し、松平忠直が完成させたといわれていますが、平成の大修理の際、天和3年(1683)に完成したことが判明しています。

全体に数奇屋風の要素を取り入れながら天井を高くし、格式を重視した建物となっています。

西福寺境内建物【市】

西福寺の伽藍は重要文化財以外もよく整っており、玄関、総門、庫裏門、鐘楼、念仏堂が市指定文化財となっています。

このうち総門は寛永年間(1624～1644)の建立と伝えられ、故築された阿弥陀堂を除くと西福寺最古の建築物です。

総門▶

所 在 地　敦賀市原13-7
電話番号　0770-22-3926　　拝観時間　9:00～17:00
拝 観 料　大人300円、中学生以下無料(団体割引30名以上250円)

旅の杖跡に残る詠

おくのほそ道

元禄2年(1689)俳聖松尾芭蕉は江戸深川を出立し、後に『おくのほそ道』の題材となる東北・北陸への旅に出ました。そして旧暦の8月、中秋の名月にあわせて敦賀を訪れます。氣比神宮に参詣し、また舟を仕立てて色ヶ浜を訪れ、地元の俳人と交流して多くの句を詠んでいます。

おくのほそ道の風景地
けひの明神(氣比神宮境内)【国 名勝】

仲秋の名月の前夜の8月14日に氣比神宮を参詣した芭蕉は、人々のために参道を整備した遊行上人の故事にちなんで「月清し遊行のもてる砂の上」と詠んでいます。氣比神宮境内には、大鳥居など芭蕉が訪れた当時の情景が今に残っています。

奥の細道(素龍清書本)【国 重要文化財】

元禄7年(1694)に能書家の柏木素龍が清書した「おくのほそ道」の完成形です。表紙の題簽は芭蕉直筆です。芭蕉の死後この素龍本は、弟子や俳人に伝わり、最終的には敦賀の西村家に伝わりました。

[個人蔵]

竹杖【市】

敦賀を訪れた芭蕉は、唐仁橋(現相生町)にあった出雲屋に滞在しました。出立に際し芭蕉は出雲屋に自身の杖と笠を残していったといわれます。のちに笠は失われてしまいますが、杖が今に伝わっています。

[市立博物館蔵(展示は不定期)]

鐘塚【市】

延元2年(1337)金ヶ崎の戦いで敗れた南朝軍は、陣鐘を海に沈めたと伝えられ、芭蕉はこの物語を聞き「月いづく鐘は沈る海のそこ」と詠みました。この句が「おくのほそ道」に採られていないことを悟しんだ敦賀の俳人たちは宝暦11年(1761)、金前寺に句碑を建立しました。

所在地　敦賀市金ヶ崎町1-4

北陸道総鎮守

氣比神宮

大宝2年(702)の社殿建立と伝えられる氣比神宮は、越前国一之宮として知られ古代には日本海沿岸各地に社領を有し勢力を誇りました。戦国時代末期、朝倉氏と命運を共にしたため兵火に遭いましたが、江戸時代に再建されました。昭和20年(1945)の空襲には、旧国宝の社殿ほか主要な建築を焼失したものの、幸いにも大鳥居は焼失を免れ重要文化財に指定されています。

大鳥居【国 重要文化財】

大鳥居は、古くは東の参道にあり14世紀に暴風雨で倒壊したと伝えられ、中世の絵図にも描かれています。現在の大鳥居は正保2年(1645)に小浜藩主酒井忠勝の寄進により現在の地に建立されたものです。

この大鳥居は、全体に朱漆が塗られ、高さが10.93m、主柱間7.45mあり由緒ある神宮にふさわしい堂々たるものです。

ユーカリノキ【市】

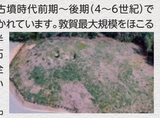
ユーカリはオーストラリア原産の植物でグロブルスという種類が、明治初頭に日本に渡来しました。このユーカリは昭和初期に奉納されたものです。

所 在 地　敦賀市曙町11-68
電話番号　00770-22-0794　拝観時間　9:00～17:00

中郷古墳群

中郷古墳群【国 史跡】

敦賀平野の南東部の山麓に位置する複数の古墳群で、このうち向出山古墳群(3基)と明神山古墳群(5基)が指定されています。築造時期は古墳時代前期～後期(4～6世紀)で様々な形式の古墳が築かれています。敦賀最大規模をほこる向出山1号墳では朝鮮半島の影響を強く受けた石室が築かれ、出土品も全国有数のものとなっています。



所在地　敦賀市中

向出山古墳出土品【市】

中郷古墳群のうち向出山1号墳からは、鉄剣や鉄刀、鉄鏃などの鉄製武器、銅鏡、須恵器など多くの副葬品が出土しています。特に鉄地金銅装眉庇付冑(金メッキを施したかぶと)と鉄地金銅装頸甲(金メッキを施した首まわりのよろい)がそろって出土しており、これは全国的にもあまり例がない貴重なものです。

[敦賀郷土博物館蔵]

穴地蔵古墳

穴地蔵古墳【県】

古墳時代の7世紀ごろ造築された、直径11m高さ3.5mの円墳で玄室の奥に石棺を備えています。石棚には地蔵尊が祀られており、近世初頭までは石室の前に堂舎が建ち地蔵信仰の場となっていました。

石棺を持つ古墳は当時周辺で製塩にたずさわっていた人たちとの関わりが指摘されています。

所在地　敦賀市樋川

瓜生保戦死の地

瓜生保戦死の地【市】

瓜生保は南北朝時代の武将で南越前町にあった杣山の城主です。新田義貞が金ヶ崎城に籠った際に南朝方として金ヶ崎城の救援に向かいましたが、樫曲付近に布陣する北朝方の今川頼貞軍2万余騎に行く手を阻まれ、非業の戦死をとげました。

所在地　敦賀市樫曲

定広院の石仏

定広院墓地の石仏【市】

笏谷石で造られた三十三躯の石仏群で、千手観世音菩薩、地蔵菩薩、如意輪観世音菩薩、馬頭観世音菩薩、不動明王等が彫られています。類似の石仏が一乗谷朝倉氏遺跡に多く見られ、朝倉氏や疋田一帯を治めた疋壇氏の隆盛期にあたる15世紀中期の年紀があることなどから、朝倉文化との関連が考えられます。

所在地　敦賀市疋田

気比の松原

気比の松原【国 名勝】

敦賀湾の最奥にあり、碧海に沿ってアカマツ・クロマツが延び広がる景勝地です。古くは氣比神宮の神苑でしたが、江戸時代には小浜藩有林となり、版籍奉還後は国有林となりました。戦時中に戦争用資材として一部が伐木され面積が縮小しました。

約1.5kmにわたって続く白砂青松の景色は、敦賀を象徴するものとなっています。

駐輦の碑【市】

明治11年(1878)10月10日、明治天皇は北陸行幸の際、気比の松原に立ち寄り白砂青松の佳景を眺められました。のちにこの地を訪れた勝海舟は、往時を回想して漢詩を詠んでいます。この碑にはその時の漢詩「曾経魁輦處　黎首慟甘裳　松籟如奏曲　海濤和洋々」が刻まれています。

所在地　敦賀市松島町

来迎寺

木製加飾腰高障子【県】

腰高障子とは腰板の高さが約60cmぐらいある明障子で、腰板の部分が絵画などの装飾が施されたものもあります。来迎寺の腰高障子は絵画だけではなく竹細工などを巧みに施した豪華なもので、敦賀城が破却された際に移したものと伝えられています。

観音像図【市】

観音を中心に左右に侍女を従え、背後に岩石松樹や滝を配した構図となっています。中国の元・明時代の南画の影響を受けたと見られ、のびやかな明朝さがただけよいます。

所在地　敦賀市松島町2丁目5-32
※法要時、住職不在時等は、堂内の見学はできません。

永賞寺 九重塔

永賞寺 九重塔【市】

笏谷石で造られた高さ3.1メートルの層塔で、大谷吉継の供養塔だという伝承があります。風化により各重の笠や塔身は損耗が進んでいますが原型は保っており、近世初期の笏谷石製石造物として希少なものです。

所在地　敦賀市栄新町11-20

歴史絵巻に名を遺す

敦賀の城郭

金ヶ崎城跡【国 史跡】

所在地　敦賀市金ヶ崎町

市街地の北東部、天筒山から延びる尾根が海につきだした位置にある山城で、三方を海に囲まれた天然の要害です。

南北朝時代の延元元年(1336)に新田義貞が後醍醐天皇の皇子である恒良・尊良両親王を奉じての足利軍と対峙しました。また、戦国時代の元亀元年(1570)越前の朝倉氏攻めで金ヶ崎城を攻略した織田信長が近江の浅井長政の裏切りにより退却した信長退却戦の舞台となりました。

玄蕃尾城跡【国 史跡】

所在地　敦賀市刀根・長浜市

越前と近江の境にある柳ヶ瀬山(中尾山:標高420m)にある山城で、北國街道と刀根越間道の分岐する要衝に位置します。北ノ庄城主であった柴田勝家が麓ヶ岳合戦時の本陣として築城したと考えられています。尾根上に配された郭は空堀や土塁で区画され巧妙につくられた虎口や馬出しなどが備わっており、最も発達した構造を示す織豊系山城の典型です。

疋壇城跡【県】

所在地　敦賀市疋田

近江と越前を結ぶ海津越・塩津越・柳ヶ瀬越の3街道が交わる疋田集落の後背の丘陵地に築かれた平山城で、文明年間(1469～1487)に朝倉氏の家臣であった疋壇対馬守久保が築城したと言われています。元亀元年(1570)の織田軍の進行で落城し、織田軍退却後に回復しますが、天正元年(1573)の織田軍による再度の越前侵攻で完全に陥落し破却されました。

敦賀城跡

所在地　敦賀市結城町

敦賀城は、天正11年(1583)に蜂屋頼隆が敦賀の領主となってから築城が始まり、天正17年(1589)には大谷吉継が敦賀城主となり建設を引き継いだといわれています。

絵図などでは三層の楼閣を持つ城郭として描かれていますが、関ヶ原の戦い後の元和2年(1616)に破却されてしまいました。大谷吉継によってなされた敦賀城の拡張と町立ての整備は、近世敦賀湊の繁栄の礎となりました。

線路を行き交い時代が駆ける

鉄道遺産

明治新政府の富国強兵策の重要課題の1つに掲げられた鉄道敷設は、明治2年(1869)に東海道と、敦賀～琵琶湖間への敷設が決定しました。明治12年(1879)に敦賀～米原間の着工が決まり、同15年(1882)に敦賀～長浜間(柳ヶ瀬トンネル区間を除く)が開通、同17年(1884)には柳ヶ瀬トンネルが完成して全通しました。日本海の海運と琵琶湖水運が鉄道で直結されたことで、敦賀港の荷物取扱量は飛躍的に増加し、近代敦賀の発展につながりました。

※金ヶ崎鉄道桟橋の建物群と線路

旧北陸線トンネル群【国登録】

明治29年(1896)敦賀～福井間の鉄道が開業しました。敦賀から今庄(南越前町)に至る山中峠は急こう配の難所で、ここを越えるため13のトンネル、築堤、橋梁、暗渠など多くの土木構造物が築かれました。このうち現存する11のトンネルと暗渠1カ所、ロックシェッド1カ所が登録有形文化財となっています。

※写真は、建設当時通信大臣であった黒田清隆の揮毫による葉原トンネル南側坑口の石額拓本(上)と北側坑口(下)

小刀根トンネル【市】

明治14年(1881)に完成した小刀根トンネルは、翌年の鉄道開業から昭和39年(1964)の柳ヶ瀬線廃線まで利用されました。トンネル内部は岩盤の露出部分とレンガ積みの二段構造になっており、当時の建築技術を伝えています。

所在地　敦賀市刀根

柳ヶ瀬トンネル

長浜～敦賀間の県境にまたがるトンネルで明治17年(1884)に完成しました。当時としては国内最長の1,352mあり、難工事のため完成までに4年の歳月を要しました。

所在地　敦賀市刀根

旧敦賀港駅ランプ小屋【市】

ランプ小屋は、蒸気機関車の運行に欠かせないランプ(カンテラ)等を保管した倉庫で、明治15年(1982)の鉄道開業時に給着駅である金ヶ崎停車場(のちに敦賀港駅と改称)に建てられました。イギリス積みの煉瓦造となっていて、内部は物置庫と油庫に分かれています。

所在地　敦賀市金ヶ崎町1-19

眼鏡橋

敦賀～長浜間の鉄道は開業当初は現在の路線ではなく、旧国道8号線に沿って港まで線路が伸び、氣比神宮前に敦賀駅が置かれていました。この眼鏡橋は、開業当時の路線の遺構としては貴重なものです。

明治43年(1910)に敦賀駅が現在地に移転し路線変更が行われて、鉄道橋梁としての役目を終えました。

所在地　敦賀市鉄輪町
※自家用車でお越しの方は、市営白銀駐車場をご利用ください。現地周辺に駐車はできません。

敦賀鉄道資料館

旧敦賀港駅舎を模した資料館。明治15年(1882)の鉄道開業から現在へと続く敦賀と鉄道の歴史について、貴重な史料が展示されています。

所 在 地　敦賀市港町1-25
電話番号　0770-21-0056　　開館時間　9:00～17:00
休 館 日　月曜日(休日の場合は翌平日)、年末年始(12/29～1/3)
入 館 料　無料

人道の港敦賀ムゼウム

シベリアから救出されたポーランド孤児や杉原領事代理が発給した「命のビザ」を携えたユダヤ難民を迎え入れた史実や、当時の敦賀市民との交流エピソードを紹介しています。

所 在 地　敦賀市金ヶ崎町44-1
電話番号　0770-37-1035　　開館時間　9:00～17:00
休 館 日　2020年8月31日で閉館
展示協力金　100円(高校生以下は無料)
※2020年11月3日のリニューアルオープンに伴い、上記施設概要が変更となります。

異国に繋がる扉を開けて

近代港湾遺産

敦賀港は明治32年(1899)に開港場に指定され、翌年35年(1902)にはロシアのウラジオストクとの間に連絡航路が開設されました。明治40年(1907)に、横浜・神戸・関門と並んで重要港湾に指定され国際港として発展しました。現在でも港周辺には当時の面影を残す遺産が残っています。

旧紐育(ニューヨーク)スタンダード石油会社倉庫【国登録】

明治38年(1905)紐育スタンダード石油会社が石油貯蔵庫として建設したイギリス積みの煉瓦造平屋建の倉庫です。第二次世界大戦中は軍の被服庫として利用されていました。

敦賀赤レンガ倉庫

「旧紐育スタンダード石油会社倉庫」は「敦賀赤レンガ倉庫」としてジオラマ館とレストラン館が整備され、活用されています。ジオラマ館では、明治後期から昭和初期の敦賀の街並みが再現されています。

所 在 地　敦賀市金ヶ崎町4-1　電話番号　0770-47-6612
開館時間　9:30～22:00(ジオラマ館は17:30)
休 館 日　水曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始(12/30～1/2)
ジオラマ館入館料　大人400円　小人200円

旧敦賀倉庫株式会社新港第1号・第2号・第3号倉庫【国登録】

昭和8年(1933)建築の鉄筋コンクリート造平屋建の倉庫です。倉庫内部は3分割されており、外観は段差付きのパラペット(屋根の周囲にある低い壁)や小窓の小庇、隅部のタイル張りなどが施されています。倉庫としての機能性だけではなく、当時流行した国際様式の影響が見られるモダンな倉庫です。

所在地　敦賀市蓬莱町

立石岬灯台【国登録】

敦賀半島の最北端、標高117mの高台に位置する立石岬灯台は、明治14年(1881)に日本人の技術者の手で建設された、日本海側では2番目の西洋式灯台です。建設当時は500カンデラ、光達距離15海里で石油灯を利用していました。灯台は敦賀の近代化と繁栄の象徴として、敦賀市章のデザインの一部にもなっています。

所在地　敦賀市立石

敦賀経済繁栄の象徴

大和田銀行

現在博物館通りと呼ばれている通りは、かつては商店が立ち並び、旧大内通り(現:元町)・児星川まで続く敦賀のメインストリートでした。

大和田銀行は明治25年(1892)に創業し、福井県内においては、福井銀行と並ぶ有力銀行となりましたが、終戦直後の昭和20年(1945)10月に国の政策により三和銀行と合併しました。

旧大和田銀行本店本館【国 重要文化財】

昭和2年(1927)竣工した本店建物で地上3階地下1階、鉄骨レンガ造(一部鉄筋コンクリート造)となっています。イオニア式・コリント式の柱頭で飾られた円柱、照明器具を取り巻く天井の漆喰、独創的な入り口部分のひさしなど、華やかな装飾が施されています。この建物は、1階の大理石カウンターがあるロビーや事務室、2階の貴賓室などの銀行機能のほか、3階に公会堂、地階にはレストランといった公共的機能も兼ね備えていました。

北陸最初のエレベーター【機械遺産】

旧大和田銀行本店本館には、竣工当初からエレベーターが設置されていました。当時エレベーターが設置された建物は珍しく、北陸で最初のエレベーターといわれています。

このエレベーターは、機械部分を含めほぼ全体が保存されており国産エレベーター黎明期の記念碑的遺物として、日本機械学会の"機械遺産"に認定されています。

施設案内

敦賀市立博物館

敦賀の歴史や文化財を展示する歴史博物館。博物館建物は旧大和田銀行の本店建物で、敦賀を代表する近代建築物として、平成29年に国の重要文化財に指定されています。

所 在 地　敦賀市相生町7-8
電話番号　0770-25-7033　　開館時間　10:00～17:00
休 館 日　毎週月曜日(月曜日が休日の場合はその翌日)、祝日の翌日、年末年始(12/29～1/3)
入 館 料　300円(20名以上の団体の場合250円)、高校生以下無料

みなとつるが山車会館

氣比神宮例大祭で巡行する山車を展示する資料館。実物の山車のほか迫力あるシアター映像で山車巡行の臨場感を体験できます。

併設する別館は、大和田銀行の初代本店建物で敦賀湊の繁栄の歴史をうかがい知ることができます。

所 在 地　敦賀市相生町7-6
電話番号　0770-21-5570　　開館時間　10:00～17:00
休 館 日　毎週月曜日(月曜日が休日の場合はその翌日)、祝日の翌日、年末年始(12/29～1/3)
入 館 料　300円(20名以上の団体の場合250円)、高校生以下無料

敦賀郷土博物館

八幡神社境内にある博物館。郷土史家でもあった宮司の故石井左近氏が長年かけて収集した刀剣や古文書、美術品、書画等を展示しています。

所 在 地　敦賀市三島町1丁目3-3(八幡神社境内)
電話番号　0770-22-1193　　開館時間　9:00～16:00
休 館 日　無休
入 館 料　大人・大学生200円、高校生100円、小・中学生50円(30名以上2割引き)

敦賀市教育委員会文化振興課分室

市内の発掘調査で出土した資料の整理作業や展示をしています。

所 在 地　敦賀市結城町10-9
電話番号　0770-21-1170
開館時間　9:00～17:00
休 館 日　土日祝日、年末年始(12/29～1/3)
入 館 料　無料

お問い合わせ　敦賀市教育委員会文化振興課
〒914-8501 福井県敦賀市中央町2丁目1番1号
☎0770-22-8152　E-mail bunka@ton21.ne.jp

2020.3　発行